

I 章

総括研究報告

厚生労働科学研究費補助金
(地球規模保健課題解決のための行政施策に関する研究事業)
総括研究報告書

「国際会議で効果的な介入を行うための戦略的・効果的な
介入手法の確立に資する研究」(20BA1002)

研究代表者 磯 博康 国立国際医療研究センター 国際医療協力局
グローバルヘルス政策研究センター センター長

研究要旨

日本の保健分野の国際協力は、G8 洞爺湖サミット以来、一貫して保健システムの強化や Universal Health Coverage の主流化を先導してきたことが国際的に高い評価を得ており、我が国の国際保健外交を牽引する国内関係者や専門家の経験が積み重ねられてきている。しかしながら、それらの土台となる知見や国際会議の経験は、必ずしも系統的に分析され、共有可能な形で若手・中堅の国際保健人材育成に活用されたりするには至っていない。

本研究では、我が国の国際保健人材育成のためのグローバルヘルス外交教材を開発することを目的とし、「A GUIDE TO GLOBAL HEALTH DIPLOMACY」(イローナ・キックブッシュ他)を和文翻訳し、かつ単なる翻訳にとどまらず、翻訳監修プロセスそのものが国際保健外交を担う若手・中堅の人材育成の機会となるよう、国際保健外交の専門家による解説を交えながら、背後にある国際交渉の現実と交渉プロセスのニュアンスについて議論を行い、最新のグローバルヘルス外交の知見・経験を共有することをねらいとし、全 14 回の輪読会を開催した。

今年 12 月に開催されたグローバルヘルス外交ワークショップでは、国内外の該当領域の専門家を招聘し、対面を基本とするハイブリッド形式で講義と演習を行った。講義の内容は、グローバルヘルス外交の概要や外交技術に関する講義に加えて、演習テーマに関連した医薬品アクセスと価格透明性に関する講義を加え、講義と演習が有機的に連動するようなプログラム構成とした。WHO 執行理事会での介入を模した演習では、今年度新たに作成した「医薬品アクセスと価格の透明性」をテーマとする架空シナリオに基づき、会議文書の読解、対処方針の検討、加盟国との交渉と会議での発言の演習を行い、専門家からのフィードバックを得た。

今年度実施した研究から得られた知見は、今後の教材開発や教育プログラム策定に活かし、国際会議に戦略的に介入して日本の立場を主張し意思決定に反映させる、国益及び国際的な平和を守る人材の育成の一助となるものである。

研究代表者：

磯 博康 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
センター長

研究分担者：

中谷 比呂樹 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス人材戦略センター
センター長

梅田 珠実 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
客員研究員

明石 秀親 国立国際医療研究センター
国際医療協力局 運営企画部長

勝間 靖 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
研究科長

坂元 晴香 東京女子医科大学
国際環境熱帯医学講座 准教授

細澤 麻里子 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
主任研究員

齋藤 英子 国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
上級研究員

A. 研究目的

日本の保健分野の国際協力は、G8 洞爺湖サミット以来、一貫して保健システム強化や Universal Health Coverage の主流化を先導してきたことが国際的に高い評価を得ており、2019 年日本は、国連において初めて開催された UHC ハイレベル会合にて、我が国が国際保健外交を牽引する姿勢を国際社会に示した。また、同年日本は G20 議長国

を務め、UHC、高齢化への対応、健康危機・Antimicrobial Resistance (薬剤耐性) といった国際保健の重要施策の方向性について合意を形成したほか、Tokyo International Conference on African Development においてもそのプレゼンスを発揮するなど、グローバルヘルス外交における国内関係者や専門家の経験を積み重ねてきた。

しかしながら、それらの土台となる知見や国際会議の経験は、必ずしも系統的に分析され、共有可能な形で若手の国際保健人材育成に活用されたりするには至っていない。

本研究は、World Health Organization (世界保健機関) 主要会合並びに総会を中心に、グローバルヘルスの今日的課題に関する経緯や、日本及び各国政府の動向を分析したうえで、国際的会議に戦略的に介入し、日本の立場を主張し意思決定に反映させるための手法開発と効果的な教育プログラムの確立を目的とする。

具体的には、WHO 主要会合並びに総会における討議内容や決議から、日本の介入が効果的な分野(強み)と介入しにくい分野(課題)を実証的に分析するとともに、各国のアプローチとの比較を行う(初年度)。その結果を踏まえ、WHO 会議において各国の対立が不可避なテーマ等についてケーススタディを行い、日本の立場を効果的に主張するための手法を開発する(2年目)。さらに、諸外国のグローバルヘルス外交にかかる政策研究機関の動向や、それらが有する研修プログラムの情報を収集・分析し、国際保健人材育成のためのグローバルヘルス外交教材を開発し、研修プログラムを確立する(3年目)。

本研究の特色・独創的な点は、長年にわたり公衆衛生分野で国内外の人材育成をリードし、我が国の国際保健の政策研究拠点を担う研究代表者が、WHO 執行理事会議長経験者をはじめ、実際に国際会議での交渉経験をもつ分担研究者をそろえ、国際会議のリアルワールドで現実に行われている様々な介入や交渉の情報を入手し活用しつつ、戦略的な分析と実践的な手法開発を行うことである。

B. 研究方法

本研究は3年計画で、WHO 主要会合並びに総会を中心に、グローバルヘルスの今日的課題に関する経緯や、日本及び各国政府の動向を分析し、我が国が国際的な議論に戦略的に介入し、日本の立場を主張し意思決定に反映させるための介入手法、グローバルヘルス外交教材、効果的な教育プログラムを開発する。その際、厚生労働省、外務省、国際協力機構、海外のグローバルヘルス政策実務機関、研究機関等と連携することで、より現実的で効果的な介入並びに有用な教材・研修プログラムの開発につなげる。

上記目的を視野に令和4年度(3年度)は、すでに国際的に実用書としての位置付けを確立し、無償でウェブ公開されている「A GUIDE TO GLOBAL HEALTH DIPLOMACY」(イローナ・キックブッシュ他)を和文翻訳し、かつ単なる翻訳にとどまらず、翻訳監修プロセスそのものが国際保健外交を担う若手・中堅の人材育成の機会となるよう、国際保健外交の専門家による解説を交えながら、背後にある国際交渉の現実と交渉プロセスのニュアンスについて議論を行い、最新のグローバルヘルス外交

についての知見・経験を共有することをねらいとし、全14回の輪読会を開催した。

さらに、令和4年12月に開催されたグローバルヘルス外交ワークショップでは、国内外の該当領域の専門家を招聘し、対面を基本とするハイブリッド形式で講義と演習を行った。講義の内容は、グローバルヘルス外交の概要や外交技術に関する講義に加えて、演習テーマに関連した医薬品アクセスと価格透明性に関する講義を加え、講義と演習が有機的に連動するようなプログラム構成とした。WHO 執行理事会での介入を模した演習では、今年度新たに作成した「医薬品アクセスと価格の透明性」をテーマとする架空シナリオに基づき、会議文書の読解、対処方針の検討、加盟国との交渉と会議での発言の演習を行い、専門家からのフィードバックを得ることとした。

(倫理面への配慮)

本研究は、人を対象とした研究ではないことから倫理審査の対象外である。

C. 研究結果

本年度は、ジュネーブ国際・開発研究大学院が出版した「A GUIDE TO GLOBAL HEALTH DIPLOMACY: Better health – improved global solidarity – more equity」を教材化するため、2022年6月から全14回に渡り輪読会を開催し、翻訳監修を行う他、各章のテーマ毎に、背景となった外交交渉の裏事情について、該当する決議文や報告書などから資料提供しながら参加者による議論を行った。

本年度はさらに、輪読会で抽出された国際保健用語集及び翻訳チェックをベースとして、本研究班の分担研究者が文体や専門用語の解釈を含む全体監修を行い、教材を

作成した。本教材は、グローバルヘルス外交がパンデミック条約をはじめとする様々な国際場裏での交渉が活発化している中、最新の動向と国際保健外交用語を統一した上で、グローバルヘルス外交のハンドブックとなるような日本語の実践的教材となることが期待され、さらに今後のグローバルヘルス外交ワークショップにおいても必須教材として活用される予定である。

国際保健外交ワークショップには、行政（厚生労働省、外務省）、国際協力機構、シンクタンクなどから、国際会議の経験を有する、あるいは参加予定であるが国際会議の経験に乏しい官民の中堅・若手実務者 14 名が参加した。

国際保健外交やガバナンスを理解するために、日本とタイの国際保健外交史の講義の後、世界保健総会（WHA）や主要関連会合における決議作成プロセスに関する講義を行った。また、国益の主張と国際益との調和の難しさを理解するために、交渉術に関するノウハウの講義、過去の主要保健議題に基づくケーススタディに関する対面およびオンライン講義を実施した。

対面式演習では、世界保健総会（WHA）や主要関連会合における決議作成プロセスに関する概要説明の後、実践的なスキル習得のために、本ロールプレイ演習のために用意した WHO 執行理事会における架空の議題をテーマに模擬 WHA 方式で介入の演習を実施した。具体的には、今年度は現代のグローバルヘルス外交において重要課題の一つである「医薬品のアクセスと価格の透明性」をテーマにした架空のシナリオを作成し、参加者は、数名ずつのチームに分かれ各国の代表団（米国、スウェーデン、ザンビ

ア、インドの 4 か国）として演習を行い、国際会議において経験豊富な講師陣が対面で効果的な介入方法について指導した。

今年度は対面講義・演習を原則としながらも、遠方の講師やオブザーバーも参加できるというオンラインのメリットも活かしたハイブリッド形式によるワークショップを実施した。今年度新たに作成した「医薬品アクセスと価格透明性」をテーマとした演習シナリオは、地政学的変化が顕在化したポストコロナ時代におけるグローバルヘルス外交の実際を体験するにあたり有用な教材となった。本ワークショップのような対面でのロールプレイ演習は、国際会議での暗黙知を共有するために効果的な方法であり、今後も継続して実施していく予定である。

D. 健康危険情報

該当なし

E. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

該当なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし

参考資料

該当なし